高橋 祥司

世界最悪の化学工場事故

『ボーパール午前零時五分　上・下』
Dominique Lapierre、Javier Moro 著、長谷泰訳／河出書房新社

人々に希望をもたらすはずが時として人々を絶望のどん底に突き落とすことがある。それは人為的によるものが多い。本書は、世界最悪の化学工場事故の状況を克明に描いたものである。

1984年12月２日の深夜から３日未明にかけて、インド大陸のほぼ中央に位置する都市ボーパールにあるアメリカの企業ユニオン・カーバイト社の農薬製造工場から有毒な農薬原料のイソシアン酸メチル（MIC）が漏れ出し、一挙にボーパールの住民を襲い、多数の死者を出した。

正確な死者の数は分かっていないが、本書によると事故のあった夜とその後の２日間で少なくとも８千人の死者が、最終的には１万６千人から３万人の死者が出たと推定されている。また、約50万人もの人々が様々な後遺症にその後も苦しめられている。ただし、これらの数値には住所不定の移住生活労働者などは含まれておらず、実際にはもっと多数の人が被害にあったと考えられている。

なぜこのような悲惨な大惨事が起こってしまったのだろうか。この事故の直接的な原因は、作業上のミスによりMIC貯蔵タンクに水が入り込んだことである。水の混入による発熱反応によりMICが気化し、タンク内の圧力が急上昇、安全バルブが破壊されMICがタンクより漏れ出したと考えられている。しかし本書より、この事故の背景には安全よりも利益を重視した企業体質に問題があったことが見て取れる。

事故発生当時、ライバル会社から安くてより安全な農薬が売り出されたこともあり、ユニオン･カーバイド社の農薬は販売不振となり業績は悪化した。そのため、人員が削減され、設備の保守・点検や従業員の安全教育もなおざりにされ、従業員の危険性に対する意識やモラルが著しく低下した。また、最後の砦（とりで）となる安全装置もコスト削減のため全て停止中で動作しなかった。さらに、非常に有毒な化学物質が利用され、多量に貯蔵されていることは住民に秘密にされ、安全対策や危険を知らせる手段も講じなかった。

このような状況から、ユニオン・カーバイド社の事故責任は自明のものと思われたが、事故は従業員が故意にタンクに水を流し込んだことが原因であるとし、自社に責任はないと主張した。事故発生から１年経ても当社から犠牲者に実質的

な援助はなく、４年経てようやく補償金４億７千万ドル（当時の為替レートで約600億円）を支払うことで和解した。しかし、当初想定されていたものよりも非常に少ない額の補償金しか被害者には支払われなかったことは想像に難くない。

この事故の後、アメリカを代表する化学企業であったユニオン・カーバイト社は、ダウ・ケミカルの子会社となり世界の表舞台から去った。替わって、アメリカの化学企業モンサント社が新たな農薬と遺伝子組み換え作物を手にインドに進出し、新たな問題をまた引き起こすことになる。

事故発生から30年が過ぎたが、工場はまだボーパールの街に荒れ果てた姿で残っているらしい。周囲にはいまだ多くの人が住んでいるが、飲み水として用いられている井戸からは許容量をはるかに上まわる濃度の各種化学物質が検出されており、今もなお工場による健康被害が進んでいる。

本書は、研究者、技術者や経営者としてだけでなく人として何が大切なことなのか、どのように行動しなければならないかを深く考えさせてくれる。本書の冒頭に記されたアインシュタインの言葉「人とその安全は、あらゆる技術的冒険の第一の関心事でなければならない。そのことは、作図や方程式に沈潜しているときにも、けっして忘れてはならない」をしっかり心の中に刻みつけて行動しなければならないと強く思った。

執筆者紹介

高橋　祥司

生物機能工学専攻准教授。専門領域は、分子生物学、応用生物化学。

『書名』　著者名　翻訳者名　出版社または文庫・シリーズ名　出版年　税込価格

『ボーパール午前零時五分　上・下』Dominique Lapierre, Javier Moro著 長谷泰訳 河出書房新社 2002年 各1,944円

ブックガイド目次へ